第３５号
2016年11月1日

○発行
650-0004
神戸市中央区中山手通
7丁目25-38
神戸真生塾広報誌編集係
TEL (078)341-5897
FAX (078)341-8239
E-mail:kouhou@kbshinsei-j.org

○振替口座
郵便振替01100-8-18680

納涼大会を終えて

残暑が厳しい八月二十七日土曜日、今年も保護者の方々や、地域の方々、各関係機関の方々、多くの来場者を迎え、神戸真生塾納涼大会を開催することが出来ました。

毎年、神戸真生塾の中庭を会場とし、大きなステージを出して、その周りに様々な模擬店やゲームを行い、皆様の楽しんでいる声が聞こえ、その姿を拝見していましたが、今年は様子が違います。というのも、今年は建物の外壁塗装工事が行われることになり、やむなく本館ホールでの開催となったからです。いつもとは違う納涼大会、来場される皆様に楽しく過ごしてもらえるだろうか…と、納涼大会の係である私達は不安でいっぱいのスタートでした。

今年の司会は、高校三年生のお姉さん。浴衣を着て、堂々とした姿で会を仕切ってくれました。司会をするにあたり、どのようにすれば納涼大会を盛り上げることが出来るのか、皆を楽しませることが出来るのか、神戸真生塾の大イベントを少しでも盛り上げようと、当日までに一生懸命考えてくれていました。その姿は、とても逞しく、輝いて見えました。

そして会場では、大きな盛り上がりを見せたのがビンゴ大会です。豪華な景品を手に入れる為に、ビンゴの数字が発表されるたびに盛り上がり、カードの数字を一生懸命探していました。すごく盛り上がりをみせたビンゴ大会は、規模が小さくなってしまっていた納涼大会に華を持たせてくれました。

中高生の活躍はまだまだあります。射的の模擬店を企画してくれたのは中学一年生のお兄ちゃん。射的のセットは職員と一緒に考え、制作し、会が始まるギリギリまで試行錯誤して作り上げたものです。その甲斐あって、お店は大繁盛。年下の子ども達やお客さんに丁寧にルールを伝え、優しく接している姿を見て、成長を感じました。自分が作った物をお客さんが楽しそうに遊んでいる、その様子を見るお兄ちゃんの横顔はとても満足そうだったことが印象に残っています。その他にも事前準備・片付け、模擬店の手伝い等、納涼大会の成功に一役買ってくれました。数年前は納涼大会を楽しむ一人の子どもでしたが、気付いてみれば一緒に会を作り上げる仲間になっていました。改めて月日の流れの速さ、子ども達の成長を実感した納涼大会でありました。

会が始まり、終わりに近づくと、不安に感じていた心は消え去り、子ども達と協力出来た納涼大会に達成感を覚え、子ども達と共に一つのことに向かって取組めることに感謝しました。今年で神戸真生塾を退所する子ども達にとっては少し規模が小さい納涼大会になってしまいましたが、来年開催する時には来客として来場し、元気な姿を私達に見せて欲しいと思います。

来年は例年通り雨が降らない日を選んで神戸真生塾の中庭を会場として盛大な納涼大会にしようと考えています。皆様、来年もどうぞご来場下さい。これからも職員一同、子ども達に寄り添い、共に歩み進んでいきたいと思います。

最後になりましたが、暑い中にもかかわらずご来場頂いた皆様、毎年多くの支援を下さるボランティアの方々に感謝の言葉とこれからのご健勝をお祈りさせて頂きます。ありがとうございました。

（安西　陵）

《公益財団法人 中央競馬馬主社会福祉財団》

海外研修報告
～今後の社会的養護の在り方について～

児童養護施設 神戸真生塾
児童指導員
正木　陽子

私は、この度、公益財団法人中央競馬馬主社会福祉財団が助成する海外研修生に選ばれ、二ヶ月間海外で研修する機会を頂きました。アメリカ、カナダ、デンマーク、イギリスの四ヶ国を訪れ、児童福祉、障がい者（児）福祉を中心に学びました。最初の一週間は合同研修、その後個人研修を行いました。個人研修先は自身で探さなければならず、研修生に採択されてから渡航までとても大変でした。研修先の決定だけでも、多くの方々に協力して頂きました。

最初に訪れたアメリカでは自身の英語力のなさや、一人での海外生活に不安を抱きながらの研修となりました。そんな中で、サンフランシスコ近郊にあるConcord Houseという成人の発達障がい者グループホームに二週間滞在し、グループホームでの生活を実体験しながら、職員の方の支援方法を見させて頂きました。Concord Houseの施設長は、自身の時間を割いて、Concord House以外の様々な障がい者や子どもの施設の見学に連れて行って下さいました。私を受け入れたこと、一緒に見学に行き自身が知らなかったことを学べたことを喜んでも下さいました。そういった人との出会いのおかげで、私の研修は少しずつ安心したものとなり、人として優しくありたいと感じた研修ともなりました。

Concord Houseのスタッフの皆さん

カリフォルニア州では、発達障がいのある人はまず、Regional Centerに繋げられます。そこで、生涯に渡る支援を得ます。乳幼児期であれば早期教育が行われます。義務教育期間は支援および教育の責任は学校に移されます。その間もRegional Centerの職員は見守りを続け、義務教育が終わればまたRegional Centaerが自立に向けての支援を行います。アメリカでは子どもが一定の年齢に達すると家を出て自立することが一般的です。それは、子どもが障がいを持っていても同様で、多くの発達障がい者はConcord Houseのような成人の発達障がい者グループホーム等で暮らします。Concord Houseは入居者の自立を重要視しており、家庭的雰囲気も大切にしながら、「自立に必要なスキルを教える」ことがとても意識されていました。入居者は職員の援助のもとスキルを習得していき、自立が可能と感じられれば、Concord Houseの近くにあるスタッフの常駐しないサテライトハウスに移動します。そこで生活ができれば、一人暮らしを始めます。コンコードハウスは発達障がい者が一人暮らしできるアパートも所有しています。また、発達障がい者の自立をサポートするために、支援者が、週に数時間、発達障がい者の家を訪れサポートする制度も別に存在するので、そのサービスを受けて自立することもあります。社会全体が、障がい者の自立を当然のことと考え、家族だけで障がいのある子を育てあげなければならないという考えではないのだと感じました。しかし、初めからそういう制度があったわけではなく、Regional Centar自体も、元々は障がいを持つ子どもの親が立ち上げた団体です。必要だと感じる支援がない時に、声を上げる強さ、行動に移すことのできる力がアメリカでの生活には必要で、その力がアメリカの人にはあるのだと感じました。

Concord Houseの入居者の皆さん

カナダでは、トロントでPARC（Pape Adolescent Resource Centre）という社会的養護を受けている（た）児童の自立支援機関で研修を行いました。ここは、昨年に、神戸真生塾の入所児童も数名訪れた場所であり、子ども達からの報告を聞き興味を持っていました。子ども達が体験したものを一年遅れでも実際に感じることができ嬉しく思いました。同機関は、子どもにとっての居住場所ではなく、社会的養護児童の自立支援専門機関で、職員が、子どもの進学や就職、住宅の相談を受け付け必要な支援を与えたり、子ども達が集まって情報交換や相談し合える場所の提供を行ったりしています。施設やグループホーム、里親家庭で生活していても、そこを出て自立したとしても、二十八歳までは子ども達が、何かに困った時に支援を求めることができます。そ

ういった機関があることはとても有意義だと感じました。日本において、施設が日本同様の役割を果たすのか、PARCのような機関を設立した方がいいのかは今後検討されていくべき課題だと感じています。しかし、現段階では公的な機関で、社会的養護の必要な子ども達の居住場所から独立している自立支援に特化した機関は存在しないので、児童養護施設の施設職員として、良い形での退所に導くだけの支援が入所中に行え、退所した後も子ども達が、相談をしてみようと思える職員でありたいと感じています。そして、神戸真生塾が少なくとも退所した児童にとっては必要なときに戻ってこられる、助けを求められる施設であれればいいなと感じています。

PARCの外観

デンマークでは、日本で言う、児童相談所、児童養護施設、里親、保育園、幼稚園を周り児童福祉の概要を学んだと感じています。その間、日本人妻とデンマーク人夫のお宅にホームステイさせて頂きました。毎日手作りのおいしい料理とお酒を頂きながら、両国の社会福祉や哲学、自身の目標、支援者としての在り方を議論したことを覚えています。研修以外の時間でも、志の高い人々と触れ合うことで刺激をもらい、支援者としての在り方に思いを馳せ、これからもより一層頑張っていきたいと感じる土地となりました。デンマークと日本では、文化・政治・歴史等が大きく異なるため単純比較はできません。しかし、デンマークは現場と政治が直接結びついている社会であることは強く感じました。入所児童に最善の支援を、子ども達に最善の利益をと願うのであれば、現場だけの力では限界があります。日本でどうすれば現場の意見が政治・政策に反映させることができるのかについて強く考えるようになりました。

最後のイギリスでは、オックスフォード大学にあるRees Centreという社会的養護の国際的研究機関に訪れ、研究者の方と話をする機会を頂きました。その中でも一番印象に残っていることは「乳児院では子どもの愛着は形成できない」ということです。乳児院で愛着を形成したという研究はないが、乳児院では愛着が形成できないという研究はたくさんあると言うのです。そのため、イギリスでは乳児院は撤廃し、全て里親宅に預けられる政策がとられています。もちろん、全ての里親委託が上手くいくわけではないですが、それでも乳児院で預かるより良いと言う考えです。神戸真生塾にも乳児院があり、乳児院のきめ細やかな養育を近くで見ている私にはこの内容は、すぐには受け入れることはできませんでした。しかし、これまで見てきた子ども達を振り返ってみると、受け入れざるを得ないような気もしました。この事実は乳児院の職員の頑張りや働きを否定するものではなく、交代勤務等施設で預かる上で避けることのできない点に原因があると考えています。保護者の立場からすると、預け易いという一面も有るでしょうが、子どもの成長を考えるのであれば、今後、里親の普及が進むことを望むと同時に、里親への教育や支援の拡充が必要不可欠であると感じました。

デンマークの子ども家庭センター

まだまだ、研修で訪れた場所・機関は複数あり、ここでは書ききれなかったことが多くあります。中央競馬馬主社会福祉財団のＨＰ（http://www.jrauumanushi-hukushi.or.jp）には、今研修の概要、過去の研修の報告書が掲載されています。来年5月頃には、私たちの研修報告書も完成し掲載される予定です。是非ＨＰも確認して頂けると嬉しいです。これだけ内容の濃い研修に行くことができたことをとても幸せに感じています。2ヶ月もの間、現場を離れるにも関わらず快く研修に行くことを許可して下さった富川施設長、また、現場を離れている間の仕事をフォローして下さった職員および関係者の皆様、そして、2ヶ月の不在後もすんなりと復帰を受け入れてくれた子どもたちにとても感謝しています。本当にありがとうございました。今回の研修で得たものを今後、仕事を通し還元していくことで、皆様への感謝の気持ちを示していきたいです。

（正木　陽子）

この度、正木指導員が公益財団法人中央競馬馬主社会福祉財団の海外研修生として全国で二人の内に選ばれたことは、施設にとっても栄誉あることでした。限られた準備期間でしたが、調査のテーマ、訪問国、訪問施設の選定では色んな方々の御支援がありました。福祉大国北ヨーロッパの発想から、デンマークを選んで、大阪大学教授の田辺欧教授、関西学院大学C.M.ヘアマイセン教授より同国の福祉行政や風土にふれる色々なお話を聞かして頂きました。他の方へのお礼も含め、紙面をお借りして深く感謝と御礼を申し上げます。

（施設長　富川　和彦）

琵琶湖キャンプ

神戸真生塾、恒例の夏の行事である、琵琶湖キャンプに行ってきました。

今年も、去年に引き続いて、乳児院からも子ども四名、職員二名が参加しており、子どもと職員合わせて、合計六十四名で三泊三日行ってきました。琵琶湖に入って、泳いだり水遊びをするだけでなく、ボートに乗ったり、釣りを職員と一緒にしたり、琵琶湖に流れ込んでいる川で、魚を捕まえたり、石を積んで堤防を作ったりと、子ども達も職員も、発想豊かに、様々な遊びを考え、多くの自然を満喫していました。また、林や茂みでは、普段では見られないような昆虫を、虫網と虫かごを持って、追いかけ、走り回っていました。

プログラムも、沢山用意しており、子ども達も楽しみにしている、バーベキュー、キャンプファイヤー、肝試し等、毎年恒例のプログラムもありました。高校生のお兄ちゃんたちが、バーベキューでは、火熾しから手伝ってくれ、熱い中、小さい子たちが先に食べられるようにと、具材を焼いてくれました。肝試しでも、驚かし役で頑張ってくれ、終わってからも、年下の子ども達と、楽しげにやり取りをしていました。キャンプファイヤーでは、職員と一緒に出し物をしてくれ、盛り上げてくれました。

今年のキャンプファイヤーでは、去年と違った点火方法をしており、トーチトワリングを取り入れました。トーチトワリングには、子ども達も興味津々でした。

三日間、天気にも恵まれ雨が降ることなく、大きな事故や怪我もなく、無事すべてのプログラムを行うことができました。普段、なかなか味わうことのできない大自然の中で、子ども達と一緒に過ごす時間は、子どもたちにとっても職員にとっても、とても貴重な体験になっています。プログラムや遊びを通じて、楽しみを共有し、協力して物事に取り組むことで、相手を思いやる気持ちや、挑戦する楽しさを実感できる良い体験になっていれば、嬉しく思います。普段の生活とは一味違った、自然の中での体験を通して、職員は、子ども達の新たな一面を発見し、日々の日常の中で、良い方向へ伸ばしていけたらと思います。また、子ども達にとっては、真生塾での楽しい思い出として、心に残ってくれたら、この行事は大成功だと思っています。

（山本　惇矢）

《児童養護施設連盟》バレーボール大会

八月二十九日中央体育館で行われた、第二十四回神戸市児童養護施設バレーボール大会に参加しました。

今回の大会では去年の悔しい気持ちを糧に臨みました。六月頃から子ども達から「バレーボールの練習はしないの？」と声を掛けてくれ、そこから特別に夜の時間に体育館を開け、練習が始まりました。中高生を中心に自主的に練習したり、時間が空いたときにはみんなに声を掛け集まり少しでもボールに触って慣れる努力をしました。八月、夏休みに入ると時間を決めて集まり練習に励みました。中高生の声かけで小学生の気が引き締まり練習にも力が入りました。大会当日はポジション等みんなで話し合いをしてギリギリまで声を出して練習を頑張りました。雰囲気に負けず、失敗しても声を掛け合おう！と心に決め大会に臨みました。

そして会場へ、それぞれ緊張もあったかとは思いますが今年は「勝つぞ！」と去年の悔しい気持ちを忘れず戦いました。一回戦、声を出して一生懸命ボールを追いかけ負けじと戦ったため一回戦は勝つことが出来ました。たくさんの子どもや職員が応援に来てくれ何度もその声援に助けられました。この調子で二回戦以降も戦ったのですが残念ながら負けてしまいました。しかし、どの試合もとてもよい戦いをしていました。そしてこの大会で去年より大きく成長したと感じたことがありました。それは、誰かが点数を決めても失敗してもメンバー全員がその子に寄って行き、「ナイス！！」「ドンマイ！」と声を掛けに行っていた姿です。そのチームワークが今回の一勝に繋がったと思います。子どもたち自身、手ごたえを感じた分また悔しい気持ちもあったようです。大会に参加するたびに子ども達の成長を感じることができ職員もとてもうれしく感じています。またこれが来年の大会や他のところで発揮できるようにしてほしいです。

（越智　七美穂）

ありがとうございました

寄付並びに児童招待ご芳名

敬称略・五十音順
（二〇一六年四月一日～二〇一六年九月三十日）

寄付金

安藤　華奈子
岩村　良子
上野　尚彦
大社　貴子
小沢医院
敷田　紀久子
勝木　光江
家庭養護促進協会
カナディアンアカデミー
関西学院　高等部
倉石　哲也
神戸教会
神戸松陰女子学院大学
　学生ボランティアカフェ
神戸親和女子大学
　藤原　伸夫
神戸聖愛教会　女性会
Kobe Global
　Charity Festival
斉藤　仁美
三四会
　（今永・水谷・吉田）
白坂　精子
住元　義則・淳子
東洋英和女学院
　中高部　宗教委員会
富川　直彦
中村　悦子
中村　淳子
難波　美智子
橋本　明
藤井　祥子
細見　英信
宮永　公子
綿谷　栄子

寄付物品

小幡　信子
ギャップジャパン（株）
協同食品（株）
神戸ポートワイズ
　メンズクラブ
神戸市シルバーカレッジ
　クッキーの会
神戸屋精肉店
コストコホールセール
　ジャパン（株）
サンテレビジョン
　大阪支社（株）
三宝（株）
島田　千里
シャルレ（株）
神果　神戸青果（株）
神東社（株）
清風幼稚園
チュチュアンナ（株）
P&G
広瀬　俊道
フィリップモリス
　ジャパン（株）
村井商店
ラッキーベル（株）

児童招待行事等

岩手みちのくプロレス
大阪ガス
カネディアン
　アカデミースクール
熊野神社
公益財団法人
　こうべ市民福祉振興協会
神戸女学院　高等部
関西学院　高等部
三ノ宮センター街
　2丁目商店街振興組合
新日本製薬（株）
長田真陽民生委員
日本港運株式会社（安原社長）
劇団自由人会
ヴィッセル神戸

子どものつぶやき

・大人の髪型の変化に気付き、「○○ねえちゃん、可愛いね」「いつもと違うね、アンパンマンみたいで可愛いよ」と沢山褒めてくれました。アンパンマン…（笑）。
（四歳・男児）

・事務所のお姉さんに得意げに「○○ちゃん（自分の名前）のお名前はなんでしょう？」とクイズを出しました。お姉さんが「○○ちゃん！」と答えると、とても驚き、「なんでわかったん？」とびっくりしていました。
（五歳・女児）

・生き物のテレビを見ていて「おねえちゃん！おたじゃまくしやで！！」と得意げに言っていました。おたまじゃくしだよ。
（五歳・男児）

・今日のお好み焼きに『ぜにしょうが』を入れる？」と何度も聞いてくる。他の子に「べにしょうがだよ」とつっこまれとても恥ずかしそうでした。
（七歳・男児）

・今日のおやつ『わらじもち』おいしそう。それは「わらびもち」だよ。
（四歳・男児）

・お姉ちゃん、『イクラ』焼いて。それは「オクラ」ですけど…（笑）
（十五歳・女児）

・DVDデータの読込み中。「早く飲み込んで～」
（五歳・男児）

・パジャマを脱ぐのを忘れたまま服を着ていたので、「パジャマ脱いでね。着たまま忘れているよ」と伝えると、ビックリしたように服をめくりあげるが、中のパジャマも一緒にめくってしまい見えず。「あ、無くなった」と言ってました。
（五歳・男児）

・大雨洪水警報が出て学校が休みなった朝。「お姉ちゃん、警報でとう？！」と聞いてくる。出ていると分かっていてもどうしても確認したくなるその嬉しいようなソワソワする気持ち。子どものうちにたっぷり味わってくださいね。
（十二歳・女児）

《乳児院 真生乳児院》

「みとろ果樹園」に行ったよ

～こども達の優しさに触れて～

保育士 中野 麻紀子

9月10日に乳児院のこども達6人と養護のこども達3人とで、加古川にある「みとろ果樹園」に行きました。

まずはぶどう狩りへ。ぶどう畑の斜面に御座を敷いて、上を見上げながら「どれにしようかなあ」と選ぶこども達。でも、ぶどうには袋が被せてあり、どんなぶどうが出てくるのかは開けてみてのお楽しみ。袋を開けると自分の顔ほど大きなぶどうや、少し酸っぱい小さなぶどうに、一喜一憂しながらたくさん食べ大満足なこども達でした。

次に、園内にある芝山に行って芝滑りに挑戦。持参した段ボールやスライダーにまたがって、芝山の上から歓声を上げながら滑り降りてきます。最初は恐る恐るだったこども達も、段ボールに仰向けになったりうつ伏せになったり、それだけじゃ物足りずゴロゴロ転がっていったりと大はしゃぎでした。最後の方では一枚の段ボールに養護のこども達が乳児のこども達を抱きかかえながら滑り降り、とても仲睦まじい様子にほっこりとしたあたたかい気持ちになりました。

帰りの車内は、遊び疲れて眠ってしまった乳児のこども達を両方に抱えてくれていた養護のこども達に優しさと頼もしさを感じ、安心して眠っている姿がとても微笑ましく見えました。こども達の元気や優しさに触れ、笑いの絶えない楽しい1日を過ごすことが出来ました。

日頃から交流を大事にしてきたからこそ、このあたたかい関係が築けていると思っています。これからも、こども達のお互いに思いやる優しさを育んでいけるよう、継続的に乳児と養護と交流を大切にしていきたいと思いました。

養護のお友達がお泊まりに来たよ

養護のお友達のKくんは「いつお泊まりできるの？」と会うと声を掛けてくれます。お泊まりを楽しみにしてくれていて、今日は夕方からお泊りに来ました。

お部屋の職員とバイバイした後、夕食まで乳児院で担当だった職員とたくさん遊びました。

夕食では「ご飯一番食べてるのは誰？」と聞くので、「Kくん。」と答えると、嬉しそうに食べていました。

夕食後、お部屋の子ども達が「おんぶして！」と、Kくんに抱きつきにいきます。Kくんは嫌がらずに一緒に遊んでくれて、子ども達も大騒ぎして楽しんでいました。

「トントンしてよ～。」と言って、他の子ども達が寝るまで待っていたKくんは、幼稚園でのことや、運動会の練習のことなどたくさん話をしてくれました。眠る時に「今度いつお泊まりできるの？」と聞くので、「また、お部屋にお知らせするね」と言うと、「今度はAちゃんも一緒がいいな。」と言うので、「わかった。また誘うね。」と言うと満足した様子で眠りにつきました。

楽しみにしてくれているので、今後も続けていきたいと思います。

（福井）

《保育所　真生きらきら保育園》

十月の園だより

園長　上杉　徹

昨今、他者の〝いのち〟を大切にしない出来事が多く報道され、少し残念に感じています。一人ひとりに大切な「いのち」が与えられ、それぞれに「賜物」が与えられています。その、与えられた「賜物」を日々の生活の中で大事に育て「いくこと、最大限に活かすことが〝生きていく〟ことにつながります。人はどの年齢であれ、どの様な状態であっても周りの人間と共に生き、生かされる存在です。赤ちゃんであれ、ご高齢の方であれ生きて存在する事で周りの人々、家族を始め保育園や学校、社会にて出会う人々に大きな影響を与える存在であります。

十月の聖句では『あなたがたは地の塩である。』とイエスが呼びかけています。「そのままの存在で良いですよ、すでに「地の塩」として我々の生きる世界の良い味付けになる存在ですよ。」と語りかけてくれています。誰一人として塩気がない人間はいないと神さまは丸ごと我々を受け入れています。「立派な塩になれ！」と迫ってはいません。ありのままで、周りの人と生きていくことで、他者の塩気と混じりあい、文字通り「良い塩梅（按排）」で社会を形成していくことを望まれています。

今月は運動会があります。子どもたち一人ひとりの存在をしっかり受けとめて、「地の塩」として周りのお友だちと良い仲間、良い世界を創り出す姿を見ていただくことができるかと思います。そして、その子どもたちの創り出す力（塩加減）に励まされ、元気を分けてもらえる会になればと願います。

子どもの様子
～十月の園だよりから～

【めろんぐみ（五歳児）
りんごぐみ（四歳児）】

賑やかだったセミの合唱がいつの間にか聞こえなくなり、かわりに、秋の虫たちの涼しげな歌声が聞こえるようになりました。

8月末から9月初めにかけて行われた保育参観では連日、たくさんの保護者の方にお越しいただきました。

さて、その保育参観の初日に子どもたちの初めての「けん玉発表会」を行いました。毎日、続けているけん玉の練習の成果を初めてお友だちやおうちの方にみてもらうということ、そして、友だちがけん玉に取り組む姿を見るということが、子どもたちにとっては本当に特別な体験だったようです。いつもの練習中の和気あいあいとした雰囲気は影をひそめ、皆が集中して真剣な眼差しでけん玉に取り組む姿がありました。また、その姿を見ている子どもたちも「すごい！」と感嘆したり「がんばれ！」と応援したり、友だちの良いところをたくさん発見することができていたようです。この日以降、毎朝のけん玉活動に対する子どもたちの意気込みもさらに増していっています。「少しでも上手になりたい！」という思いが強くなり、新しいわざに挑戦したり「こんなことできたよ！」「今日は○○回続けてできたよ！」と成功体験を担任に報告してくれる姿が、以前よりも多く見られるようになっています。これからも、そんな子どもたちの意欲・熱意をいっぱい受けとめながら、日々の練習を続けていきたいと思います。

9月の2週目には「ぶどう狩り」に行ってきました。雨がちな天候が続く中、幸いにも当日は良い天候に恵まれ、本当に楽しい時間を過ごすことができました。「ぶどう狩り」の前には、制作活動として、1人1房ずつぶどうの絵を描きました。実を描く際に、「ひとくちでパクッと食べられる大きさってどれぐらいかな？」と問いかけると「私はこれくらい！」「このくらいかなぁ？」とそれぞれ、ジェスチャーで表現してくれた子どもたち、中には「ぼくはこのくらい！！」と両腕で大きなマルを作っている子どももいましたが…（笑）。このように、一人ひとりがぶどうの大きさや色、味など、色々なことを想像しながら描いた、二十三房のぶどうたちが、今も保育室に飾ってあるぶどうの木に見事に実っていますよ！もちろん、ぶどう狩りで出会った本物のぶどうたちは、味も香りも格別だったようで、口の周りやTシャツをぶどう色に染めながら夢中で頬ばる子どもたちの姿がありました。

このように、様々な体験を通じ、相手の気持ちになって考えることや行動することの大切さにも少しずつ気づき始めています。

十月も、運動会、ハーブ園への遠足と子どもたちが楽しみにしている行事が盛りだくさんです。一日一日、充実した時間を子どもたちと共に過ごしていきたいです。

請川　まり子（五歳児担任）
藤津　綾萌　（四歳児担任）

子育てホットライン（相談専用）

TEL：078-341-6493

年中無休午前9時～午後6時（緊急の場合は夜間も可）
神戸真生塾　子ども家庭支援センター（ロータリー子どもの家）
Homepage　http://www.rotary-kodomonoie.org/
facebook　http://www.facebook.com/rotary.kodomonoie

子育てに困ったら先ず電話相談！

《子ども家庭支援センターロータリー子どもの家》

熊本地震支援金の募金活動

神戸真生塾子ども家庭支援センター　久山　啓

平成28年熊本地震によりお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げますと共に、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

阪神大震災の復興支援を目的として設立されたロータリー子どもの家では、少しでも被災された方の支援をしたい、被災地の一日も早い復旧と復興のための力になりたいという思いから、自分たちのできることとして地震後すぐに支援金の募金活動を始めました。

子ども家庭支援センターとして、熊本地震で被災した子どもや子育て家庭、児童養護施設等にいる子どもたちのために募金を活用したいと思い、熊本県に隣接する福岡県の同じ児童家庭支援センター仲間である「子ども家庭支援センターあまぎやま」を通して震災支援に活用していただいております。子ども家庭支援センターあまぎやまは、震災直後から精力的に支援に動かれており、児童養護施設LECセンター、避難場所になっている益城町立広安西小学校などを中心に支援しておられます。

神戸真生塾の子どもたちや職員、地域の方々、児童相談所の方々などたくさんの方から募金をいただき、これまでに75、201円を送金しました。ご協力いただいた皆様ありがとうございました。今後も継続して支援していきたいと思っておりますのでよろしくお願い致します。

編集後記

残暑も身を潜め、肌寒い季節となってまいりました。季節の変わり目ではありますが、お陰様でこども達、職員一同元気に過ごしております。

この度、広報誌「愛」は35号を迎えました。皆様にお届け出来ましたことをとても嬉しく思っております。これからも皆様の下へ、こども達の成長と共に小さな幸せをお届けすることが出来れば幸いでございます。

最後になりましたが、第35号発刊にあたりまして、ご協力頂いたすべての皆様方にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

（大伴）

神戸真生塾苦情処理委員

苦情受付担当者	久山 啓	（子ども家庭支援センター ロータリー子どもの家センター長）
	川本 真美	（乳児院 真生乳児院 家庭支援専門員）
	森本 みずき	（真生きらきら保育園 主任保育士）
	綱谷 仁志	（神戸市立自立援助ホーム子供の家主任指導員）
苦情解決責任者	富川 和彦	（児童養護施設 神戸真生塾 施設長）
	数田 紀久子	（乳児院 真生乳児院 院長）
	上杉 徹	（保育所 真生きらきら保育園 園長）
	竹原 裕昭	（神戸市立自立援助ホーム子供の家施設長）
第三者委員	森光 規之	（当法人 監事）
	中村 悦子	（主任児童委員 中央区山手地区民生委員児童委員）
苦情受付件数	平成28年	7月から10月末まで　1件